カラムシ街道市の名前の由来について

大橋寿一郎

先日、石黒地区で第六回カラムシ街道風土市が行われた。あいにく小雨のぱらつく天気であったが、四百人余の人出で賑わった。

カラムシ街道風土市は、柏崎市の七街道市の内の一つで石黒地区の恒例の行事の一つとなっている。

ところで、石黒地区のカラムシ街道風土市の名前の由来について時たま尋ねられることがあるが、私は明快な解答ができないでいた。

確かに、現在の石黒地区にはカラムシは多く自生している。特に集落内の家の周りや道端に多く見られる。

だが、カラムシは昔から白布や縮の原料として畑に栽培された時代もある植物で市内ではありふれた草の一つに過ぎない。

では、このカラムシの皮からつくる青苧を糸に紡いで織る白布や縮が石黒で特に多く生産されたものであろうか。

これについても、確たる知識を持っていなかった。村の古老に尋ねても糸紡ぎの様子の記憶は聞けたが、機織りの様子については聞くことはできなかった。

ところが、昨年、市の図書館で開いた「越佐郷村の古文書」という本で下段掲載のページに出会い

天和三(一六八三)年、今から三百年も前から石黒で白布が生産されていたことを知って驚いた。

二十六軒の村で検地の対象となる青苧畑が四反近くあったこと、また、「**新検無之、是ハはり札二而有**」とあることから天和検地の前に行われた検地時にすでに「外、白布高三石六升」であったことが分かり一層驚いた。

また、「元禄四年(一六九一)「免割御年貢帳」の「権四郎」分には左写真のような記載がある。

29　刈羽郡石黒村検地帳　一冊

(現)刈羽郡高柳町石黒

天和三年閏五月「越後国刈羽郡石黒村御検地水帳扣(控)」は、陸奥津軽藩検地による検地帳を明治三十二年刈羽郡石黒ノ内落合村大橋範顕が筆写したもの。内題は「刈羽郡別俣郷女谷村之内石黒村」。九四石四斗七升四合の村で屋敷が二六筆（うち一筆は「八歩　境目番所」）と多いが、青苧畑が三反九畝三歩あり、「古高四拾三石壱斗六升壱合、外白布高三石六升、新検無之、是ハはり札二而有」と付記されて、この村が白布の生産地であったことを示している。

「高五斗八升八合　青苧
取米（※年貢として納める米）
三斗四合」（写真赤枠内）

右隣の山高一斗二升七合と左隣の漆高四升に比べて青苧高がいかに多いか一目瞭然である。この年貢帳によると四十九戸のうち四十戸に青苧高の記載が見られる。

また、高柳町史に掲載されている、岡田、岡野町、石黒の三ヵ村の青苧高表では、年代は異なるが、安永九（一七八〇）年の石黒村の青苧高は三石九斗一升で岡野町村の一石二斗三升、岡田村一石一斗を大きく上回っている。

その他、高橋義崇著「鵜川の話」の第二巻には鵜川ではカセ〔糸〕の出荷の記録はあるが縮布の出荷の記録はなく、縮布は木綿などと物々交易をして他に売り出すことはなかったと記されている。（鵜川は平地が多く耕地に恵まれていたせいか）

ともかく、石黒では昔から青苧の栽培が盛んに行われていたことは確かである。

では、果たして、カラムシから糸を紡ぎ布まで仕上げたものであろうか。

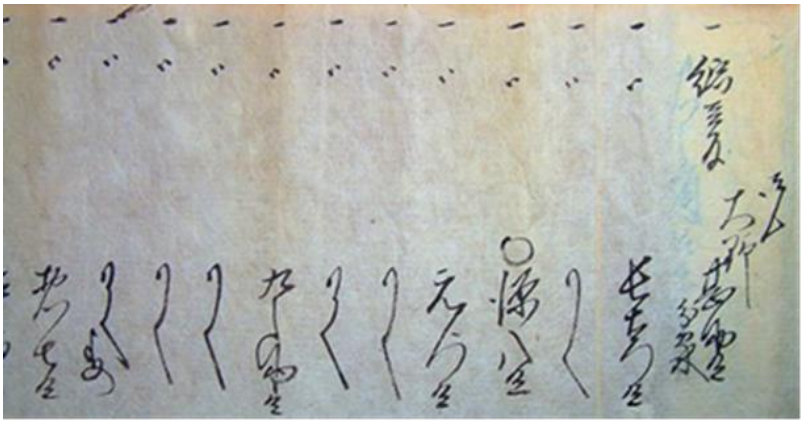
おそらく、石黒では、日常生活の中で青苧から糸を紡ぎ布に織り上げる様子を自分の目で見た世代は昭和一桁生まれの人々までであろう。

私の母は、大野の実家で自分が子どもの頃に見た、祖母が青苧から糸を手で紡ぐ苧積み（苧を裂いて撚って糸にする）の様子をよく私に語って聞かせた。夜も暗い石油ランプの下で端坐して一心不乱に仕事をしていたという。話の中で特に忘れられないのは、苧積みの仕事で、何より大切なことは心を平らに保つことであり，心の乱れが糸の撚りに現れるものだということであった。

そのほか、昭和初年生まれの居谷の田辺雄司さんの思い出文には次のような記述が見られる。

「苧桶を私の祖母はとても大切にしていたことを憶えています。夜、苧積みの仕事を始める時には部屋から桶を持ってきて石油ランプの下で静かにやっていました。仕事を終えて寝るときには苧桶を自分の寝室に運び、座敷等に置くことはありませんでした。」こうして紡いだ糸は十日町や小千谷から業者が村にやって来て買い集めて行ったという。

また、田辺さん自身も子どもの頃にカラムシ刈りを手伝わされたものだと語っておられたが、機織りの様子を見た記憶はないとの事であった。



その後、下石黒の母屋であった大橋正男家の文書で、縮の集荷を依頼する大橋市太郎宛ての文書に出会った。この文書は「覚」という題名で、半紙をつないだ畳一枚半もある長大なものである。（上

写真）年代の記載はないが宛名人の他の文書から推定するに明治中期のものであろう。記載されているのは、下石黒と大野であるが、右の文書では、大野は十五軒で二十六反を出荷していることが分かる。

覚、一、縮一反、大野　甚助殿分家。一、縮一反　長右衛門殿。一、〃　同じく。縮一反、同人。一、〃　〇源八殿。一、〃　元衛門。一、〃　同人。一、〃　同人。一、〃　九之助殿。一、〃　同人。一、〃　同人。一、〃　同人よめ　一、〃惣七殿。」

なお、右記の通り、一戸で四反が一軒見られ、内一反は「よめ」と付記されている。それにしても四反とは驚く。

小千谷市史には「最優秀者でも一冬に三反を織り出すのがせいぜいであったと言われる」とある。

これらの文書から石黒での白布や縮布の生産は天和以前から明治の頃まで盛んに行われ，技術的にも一定のレベルに達していたものと思われる。ちなみに、北越雪譜には、『弁慶縞は高柳郷にかぎれり・・・』との記述も見られる。

一方、石黒は、高柳郷の村々の中で、とくに山間へき地にあって耕地に恵まれないことから、一層白布や縮の生産が昔から盛んに行われたとの見方もできる。

いずれにせよ、ここに、我々はカラムシ街道市の名前の由来をみることができよう。

なお、カラムシ街道の誕生で忘れてならないことは、石黒の「ギャラリーからむし工房」の大橋美恵子さんの存在である。地元の自然素材を使って糸を紡ぎ布を織り染め上げる創作活動を今も精力的に続けられている。

（ＨＰ石黒の昔の暮らし編集会）